

(様式1)

[年度] 平成30年度和歌山県農林水産試験研究成果情報

[成果情報名] モモ「川中島白桃」等の果肉障害対策技術開発

[担当機関名] 果樹試験場かき・もも研究所 [連絡先] 0736-73-2274

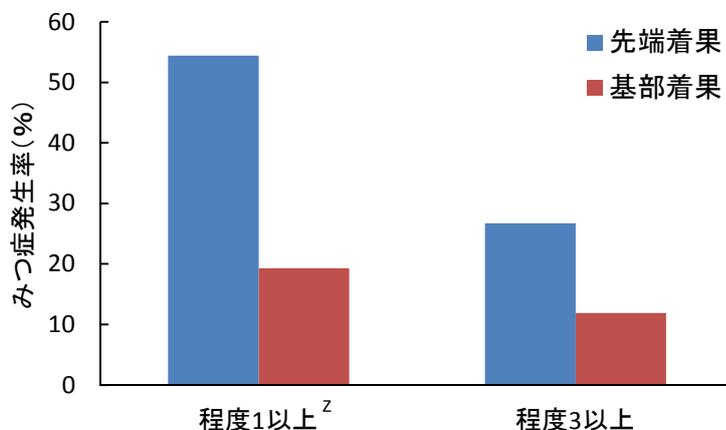
[専門分野] 果樹 [分類] 研究

[背景・ねらい]

和歌山県におけるモモ栽培において、「川中島白桃」は、大玉、高糖度で盆前に出荷可能であるため需要が高い主要品種ですが、特に若木で『みつ症』と呼ばれる果肉障害の発生が多いという欠点があります。本研究では、「みつ症」を軽減するための栽培管理法を開発しました。

### [研究の成果]

1. 結果枝の先端部に比べて基部側の果実のほうが「みつ症」の発生が少ない傾向にあることがわかりました（図1、図2）。
2. 無理な大果を狙わず、着果量を慣行の1.3倍程度多くして肥大を抑制し、果実重を300g程度にすることで、「みつ症」の発生を軽減できることがわかりました（表1）。
3. 開花後約40日から収穫時まで株元に樹冠下を覆う程度に透湿性マルチシートを敷設すると、園地によって「みつ症」の発生を軽減できました（図3）。



z: 程度1 (軽度の症状) 程度3 (重度の症状) 以後の図表でも同様

図1 着果位置がみつ症発生に及ぼす影響

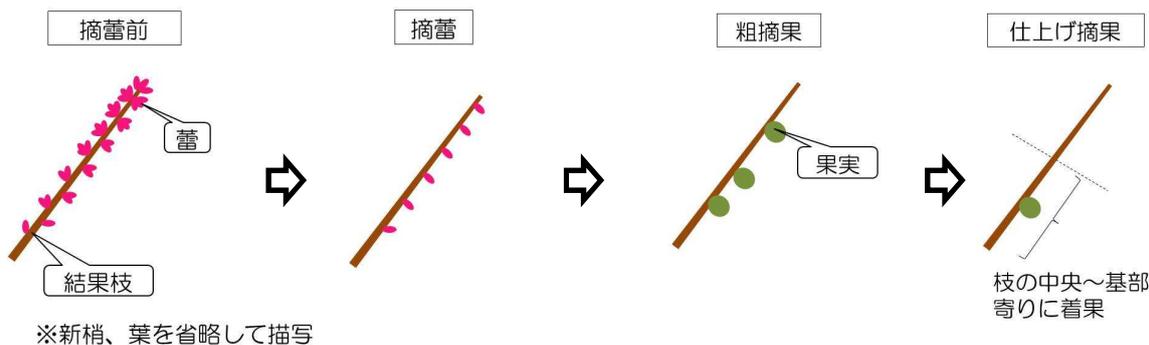


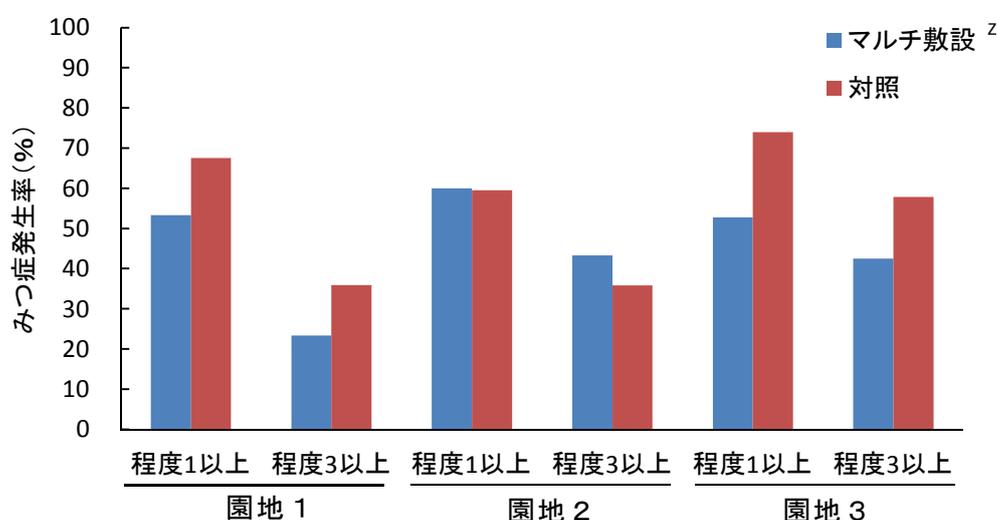
図2 基部着果の着果管理イメージ

表 1 着果程度がみつ症発生および果実品質に及ぼす影響

	処理区	平均収穫日	果実重 (g)	糖度 (Brix)	酸度 (pH)	みつ症発生率(%)	
						程度1以上	程度3以上
園地1	多着果 <sup>z</sup>	7月30日	307	16.8	4.6	18.0	8.9
	対照	7月27日	339	18.2	4.6	60.0	43.3
	有意差 <sup>y</sup>	**	ns	*	ns	**	**
園地2	多着果	7月27日	420	16.2	4.5	53.8	33.6
	対照	7月26日	423	16.0	4.5	52.8	42.5
	有意差	ns	ns	ns	ns	ns	ns

z : 樹冠面積あたり対照の 1.3 倍量

y : t 検定により、\*\*は 1%水準、\*は 5%水準で有意差あり、ns は有意差なし  
(みつ症発生率はアークサイン変換後に検定)



z : マルチ敷設は満開約 40 日後に樹冠下を覆う程度で実施

図 3 マルチシート敷設がみつ症発生に及ぼす影響

#### [成果のポイントと活用]

1. 「川中島白桃」において、多着果と基部着果および透湿性マルチシート敷設により、「みつ症」を軽減できる栽培管理技術を開発しました。
2. 多着果により果実がやや小さく、収穫がやや遅くなる場合があります。
3. マルチシートの敷設は急激な土壌水分変動を抑制するものであり、土壌乾燥が目的ではないため、高温乾燥時にはかん水が必要です。
4. 果実肥大の旺盛な樹では効果が低い場合があります。

#### [その他]

予算区分 : 県単(農林水産業競争力アップ技術開発事業) 研究期間 : 平成 28~30 年

研究担当者 : 堀田宗幹、有田慎、和中学

発表論文等 : モモ果実の水浸状果肉褐変症に関する研究(第 2 報). 和歌山県農林水研報 7. 2019.

ホームページ掲載の可否 : 可